

氏名：酒井遙哉

(論文主旨)

本研究は、国際的仏教学者であり教育者でもあった高楠順次郎(1866–1945)の自筆日記(以下「高楠日記」)を対象に、テキストマイニングによる量的分析を行ったものである。分析対象とした日記は、1920年、1925年、1927年、1928年、1931年、1933年の6年分であり、武蔵野大学所蔵のPDF資料をOCRによりテキスト化した後、日付・地名・人名をアノテーションし、頻出語分析および共起ネットワーク解析を実施した。日記は日本語・英語・漢文・旧仮名遣いが混在しており、絵や図は除外して処理を行った。分析結果として、1928年に日記記録が最多となり、活動拠点である「武蔵野女子学院」「東洋大学」のほか、修養道場「楽山荘」、仏教講習の場であった「御殿場」や「沼津」などの地名出現頻度が高かった。また、人名では、楽山荘建設に関わった小松千莎(「小松女史」等の表記)や、「大正新脩大蔵経」編纂責任者の小野玄妙、「霜子」(妻)などが頻出した。共起ネットワーク解析では、地名間では「武蔵野」と「東洋大学」、人名間では「小林」と「前川」などの強い共起が確認され、高楠の活動領域と人的交流の構造が視覚的に把握できた。本研究は、高楠日記をデータ駆動型で分析しており、今後は未テキスト化分や旧仮名遣いや漢文への自然言語処理技術の適用方法の開発を進める予定である。